

資料

〇つつが虫病について

「つつが虫病」は、かつては山形県、秋田県、新潟県などで夏季に河川敷で感染する風土病でしたが、今では、北海道や沖縄県など一部の地域を除いて全国で発生するようになりました。

つつが虫病の発生は、ツツガムシの幼虫の活動時期と密接に関係するため、季節により消長があります。関東や九州地方を中心に、秋～初冬に多くの患者が発生していますが、東北・北陸地方では春～初夏にも発生が見られるため、全国的にみると年間では春～初夏及び秋～初冬の2つの発生ピークがみられます。

〇症状

5～14日の潜伏期の後に、典型的な症例では39℃以上の高熱を伴って発症し、皮膚には特徴的なダニの刺し口がみられ、その後数日で体幹部を中心に発疹がみられるようになります。発熱、刺し口、発疹は3つの主要徴候とよばれ、およそ90%以上の患者にみられません。

その他、全身倦怠感、食欲不振とともに頭痛、悪寒などを伴います。

初期病巣は、ツツガムシの刺口部で、腋の下や陰部などの柔軟部に多く見られ、その有無は診断上重要です。まれにこの刺口部を欠くこともあります。

また、重症化して肝機能障害や中枢神経症状を呈し、死に至ることもあります。

〇病原診断

確定診断は主に間接蛍光抗体法、および免疫ペルオキシダーゼ法による血清診断で行われています。診断用抗原には Kato、Karp、および Gilliam の標準型に加えて、Kuroki、および Kawasaki 型を用いることが推奨されています。ある特定の血清型だけに抗体が上昇する場合があります(つまり、血清学的な交差反応が株間でみられない場合がある)、流行に合わせて新しい血清型も使用しないと、診断できないことがあるためです。判定は、急性期血清で IgM 抗体が有意に上昇している時、あるいは、ペア血清で抗体価が 4 倍以上上昇した時を陽性とします。

また、ワイル・フェリックス反応では OXK 陽性となるが、陰性のこともあるので注意が必要です。病原体診断には、末梢血中からの菌の DNA 検出が用いられています。EDTA 加全血からバフィーコート分画を分離し、DNA を抽出後、nested PCR 法による検出がなされます。また、この方法で菌の血清型別も可能です。菌分離はマウスや培養細胞を用いて行われるが、P3 実験施設が必要であり、時間もかかるので診断には実用的ではありません。

〇治療

ダニ媒介性リケッチア症の一般的な治療法、および予防法に準じて行います。治療には、早期に本症を疑い、適切な抗菌薬を投与することが極めて重要です。第一選択薬はテトラサイクリン系の抗菌薬であり、使用できない場合はクロラムフェニコールを用います。 β ラクタム系抗菌薬は無効です。

〇感染症法における取り扱い

つつが虫病は 4 類感染症に定められており、診断した医師は直ちに最寄りの保健所に届け出てください。報告のための基準は以下の通りです。

〇診断した医師の判断により、症状や所見から当該疾患が疑われ、かつ、以下のいずれかの方法によって病原体診断や血清学的診断がなされたもの。

- ・病原体の検出
例、血液からの病原体の分離など
- ・病原体の遺伝子の検出
例、PCR 法など
- ・病原体に対する抗体の検出
例、血液からの間接蛍光抗体法あるいは間接免疫ペルオキシダーゼ法で抗体価の 4 倍以上の上昇か、IgM 抗体上昇など

○ツツガムシとは

ツツガムシは、ダニの一種で、山林、河川敷などの草地、耕作地などの地中に広く分布しています。幼虫（体長約0.3ミリ）は一代に一度、地中から出て、草の先端などで待機し、野ネズミなどの温血動物が通ったときに体表に吸着し、体液を十分に吸った後（2～3日）、体表より離れ、再び地中に入り、若虫へと成長します。

○感染経路

病原体オリエンティア・ツツガムシ（*Orientia tsutsugamushi*）の自然界における宿主はツツガムシで、ツツガムシが卵から若虫へと成長するサイクルの中にヒトが入ると、偶然にツツガムシの幼虫に刺咬され、その際に刺咬口からオリエンチアに感染し、つつが虫病を発症することになります。

なお、ヒトからヒト、ネズミからヒトへの直接の感染はありません。

○予防対策

つつが虫病用のワクチンがなく、免疫学的に予防することはできませんが、地域におけるつつが虫病の発生時期を知り、山林、河川敷などの草地、耕地などに立ち入る際や立ち入った後に、次の事項を守れば予防につながります。

○素肌の露出を避けるため、長袖、長ズボン、長靴、手袋などを着用する。

○草の上に腰をおろしたり、寝転んだりしない。

○作業中に脱いだ上着やタオルなどを草の上に放置しない。

○できれば皮膚の露出部にダニ忌避剤を塗布する。

○山林に立ち入った後は入浴し、体に付着しているおそれのあるツツガムシ幼虫を洗い落とす。また、皮膚に刺口（トゲを刺した感じの箇所）がないかどうか確認した上で必ず着替える。脱いだ衣類を放置すると、衣類に付着したツツガムシにより家族が感染するおそれがあるのですみやかに洗濯する。